

【研究者インタビュー】 No.3 経済学研究科 近藤 真司 教授

引用	研究者インタビュー. 2019, 3
URL	http://hdl.handle.net/10466/00016995

リポジトリ・オープンアクセス研究者インタビュー No.3

経済学研究科 近藤真司教授

2019年11月12日(火)

図書館ではリポジトリ、オープンアクセスについて広く知っていただくために、研究者インタビューを実施しています。今回は、2009年のリポジトリ OPERA の開設に関わって、経済学研究科紀要論文の公開にご尽力いただいた近藤先生にお話を伺いました。

図書館：

先生の研究分野について教えてください。

近藤先生：

「経済学史」という分野です。「経済史」とは違って、「経済学説史」や「経済思想史」を含む分野をいいます。その中でも、19世紀末から20世紀初頭のイギリス、ケンブリッジ大学で経済学部を作ったアルフレッド・マーシャルと、その下で教育を受けた経済学者の学派、「ケンブリッジ学派」の理論や思想、その歴史的背景の研究をしています。マーシャルや彼らが生きた19世紀末のイギリスは、産業革命後ロンドンに人口が集中し、労働者が非常に過酷な労働条件で働かなければならず、経済格差や貧困問題などの社会問題が起きました。



また、この時代はイギリスの国際競争力が低下した時代でもあります。19世紀のイギリスは、ものづくりの時代でしたが、19世紀末から20世紀初頭には、ドイツやアメリカに追い越され、第一次世界大戦終了後は、アメリカに経済的主導権を握られてしまいます。そのため、何とか国際競争力を取り戻さなければならず、イギリスは金融の街に変わっていきます。まさに今の日本と一緒です。1990年までの日本は絶好調で”Japan as Number One”と言われましたが、徐々に日本の国際競争力は低下し、中国にも抜かれています。

図書館：

経済研究科は紀要のリポジトリ公開に積極的でしたが、どのような方針で進めておられたのでしょうか？

近藤先生：

社会科学の分野は実験をしない文献学が多いため、論文を読んで研究することになります。論文を公開したり、他大学の論文を見る機会が多いので、将来的にはどの大学でも公開が進むだろうと考えて、過去の紀要をリポジトリに載せることになったのだと思います。また、経済学部の当初から発行していた『[経済研究叢書](#)』が、普通の図書として販売できなかったのが、リポジトリで公開すればアクセスしやすく、読んでもらえるのではと考えたからです。当時、『[経済研究叢書](#)』は経済図書室などに連絡するしか入手できませんでした。リポジトリで公開されたことによって、今でも引用する人はいるようです。

図書館：

他大学の論文や、オープンになっている論文は利用されますか？

近藤先生：

私の研究分野の論文は、既存の研究に対して文献をあげなければいけません。今では他大学の論文も、古い大学なら戦前のものでアクセスできますから文献を探すのが楽です。30年ぐらい前でしたら、ケンブリッジ大学の昔のジャーナルを見るために現地へ行って論文をコピーして、1ヶ月くらいかけて全部手作業で集めましたが、今は全部ネットで見られるので、かなり楽になりました。今のリポジトリは、著作権については全く問題がないので助かっています。

図書館：

オープンアクセスジャーナルに投稿されたことはありますか？

近藤先生：

学会誌でオープンになっているものはあります。昔ながらの学会は、冊子体ジャーナルを学会員に配布していますが、何年かしたらそれもオープンアクセスにしていますので、徐々に電子化されていくことは確かだと思います。例えば私の名前で Researchmap のデータベースを検索すると、私の執筆論文が表示され、リポジトリで公開しているものは本文にリンクされています。今は、経済学研究科のワーキングペーパー等も公開しているので、自分の研究の発信にもなっていると思います。

図書館：

リポジトリやオープンアクセスについて、先生のご意見をお聞かせください。

近藤先生：

オープンアクセスが進めば、お互いにメリットはあると思います。研究論文だけでなく、先生方が講演された講演文なども公開すれば、学生にも薦めやすいと思います。どれくらい論文が引用されているかということも重要になってきますね。

また、経済学研究科では紀要を作成していますが、将来的に各大学の紀要は発行されなくなって、高い電子ジャーナルを買わなければいけなくなるのでは、と危惧しています。学術雑誌に載せるとなると、書き直し等々で掲載まで1年ぐらいかかりますが、紀要には、早く出版されるというメリットがあります。急ぐ場合は、紀要やワーキングペーパーに載せて先に発表します。また、学会誌では載せられない資料などを発表する場合にも使えるので、今後もリポジトリを活用していきたいと思っています。

図書館：

近藤先生、お忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。